

そろそろ平地の水田付近で、「アキアカネ」の姿を見ることのできる季節となりました。

この日本特産種である「アキアカネ」は、夏の暑さが苦手なようで、盛夏の間は山頂や高原などへ「避暑」に出かけています。

ですから、初夏に水田などから羽化した「アキアカネ」は、“涼”を求めて高標高地へ移動している夏の間は、“生まれ故郷”の水田付近に姿はなく、秋になって再び戻ってくることから、“秋にしか姿が見られない”「アキアカネ」という名前になったようです。

一方、「ナツアカネ」という種もありますが、こちらは「アキアカネ」と同じ時期に同様の場所で羽化するのですが、夏の間も“生まれ故郷”の水田付近で過ごしていることから、“夏に姿が見られる”「ナツアカネ」という名前になったようです。

山田耕筰作曲・三木露風作詞の童謡「赤とんぼ」に登場する種は、「アキアカネ」だろうと言われていますが、昨秋、三木露風が幼い時期を過ごした兵庫県の「たつの市」に出かける機会がありました。

“さぞかしたくさんの赤トンボが群れ飛んでいるのだろうな...”との予想に反して、ほとんど赤トンボの姿を見ることはできませんでした...

地元の方に聞いてみると、「農薬の影響なのかどうかわからないが、近年は赤トンボの姿を見ることが非常に難しくなった...」とのこと。

マンホールの蓋を始め、町のあちこちで赤トンボの絵がシンボリックに使われているばかりか、夕方になると、町中に童謡「赤とんぼ」のメロディーが流れるのですが...

さて、夏の間、たくさんの赤トンボの姿を見ることのできた南河内の山々の山頂付近では、秋の気配が日々色濃くなっていく今、もうその姿を見ることはできないのでしょうか...?

いえいえ、まだまだたくさんの「アキアカネ」が飛んでいます。

体の色を見ると、もう十分に成熟しているように思うのですが、まだ山麓の水田に降りていくほどには涼しくなってはいない、ということなのでしょうかね？

### 写真 ・ : アキアカネ

もう十分赤くなっていますね。

この種は、「ナツアカネ」のように顔や胸までは赤くなりません。

### 写真 ・ : アキアカネ

こちらも成熟しているようです。

(アキアカネのはあまり赤くはならない個体が多いです)

次に、この時期になって鳴いている姿を見ることができるようになった「キリギリス」を紹介します。

キリギリスは、夏の初め頃から鳴き始める種ですが、背の高い草むらの中で鳴くことが多いので、鳴いている姿を見ることはありませんでした。

でも...

別添の写真のように、この時期には結構鳴いている姿を見ることができるようになってきたのです。

この種の活動時期は10月末頃までですので、もしかするとまだ交尾していない雄が、かなり焦ってきて、草むらの外の目立つ位置で“自己アピール”を始めたのかも知れませんね...

有名な童話「アリとキリギリス」では、キリギリスは歌ってばかりで冬への備えもしない“怠け者”として描かれていますが、そもそも越冬をしない彼らにしてみれば“不本意”なことなのでしょう...

### 写真：草むらの外に出てきた「キリギリス」の

### 写真：鳴いている「キリギリス」の

と の写真をよく見比べると、 では羽を震わせているところがわかるでしょうか？

(羽をこすり合わせて、「ギ-ッ チョッ」と大きな音を出しますが、羽を大きく動かすのではなく、激しく震わせている、という感じですね)



















